

輸入検疫で発見された主な病害虫

平成9年に輸入された植物から発見された主な病害虫は下表のとおりである。これら病害虫の多くは携帯品で持ち込まれた輸入禁止生果実から発見されている。また、表には示していないが、輸

入禁止対象・特定重要病害虫以外でもマレーシアミバエ (156回)、セグロモミバエ (64回) 及びモミバエ (5回) 等侵入を警戒している重要な害虫も発見されている。

	発見病害虫名	寄主植物別発見回数	輸出国別発見回数	
輸入禁止対象病害虫	<i>Ceratitis capitata</i> チチュウカイミバエ (5件)	イチジク(2)カニステル(1)メーリンゴ(1)トウガラシ(1)	ペルー(2)フランス(1)ポルトガル(1)ガーナ(1)	
	<i>Bactroera dorsalis</i> species complex ミカンコミバエ種群(280件)	マンゴウ(71)パンジロウ(52)レンパ(45)ナツメ(15) モンピン(15)パンレイシ(12)トウガラシ(9)他21種(61)	台湾(99)フィリピン(64)タイ(49)ヴェトナム(22) マレーシア(11)ハワイ(5)他11カ国(30)	
	<i>Bactroera cucurbitae</i> ウリミバエ(27件)	ニガウリ(11)ササゲ(5)キュウリ(3)トカドヘチマ(2) レンパ(2)ヘビウリ(1)ベボカボチャ(1)ウリ科(2)	タイ(7)フィリピン(7)台湾(6)バングラデシュ(3) ヴェトナム(1)インドネシア(1)インド(1)マレーシア(1) オーストラリア(1)	
	<i>Bactroera tryoni</i> ウインズランドミバエ(1件)	イチジク(1)	オーストラリア(1)	
	<i>Cylas formicarius</i> アリモドキノウムシ(8件)	サツマイモ(6)オオバコエンドロ生茎葉(1) コショウ属生茎葉(1)	タイ(3)フィリピン(3)台湾(2)	
	特定重要病害虫	<i>Colletotrichum capsici</i> (16件)	トウガラシ生果実(15)ピーマン生果実(1)	タイ(13)台湾(2)フィリピン(1)
		<i>Anastrepha fraterculus</i> ミナミアメリカミバエ(2件)	パンジロウ(2)	ブラジル(2)
		<i>Diabrotica undecimpunctata</i> ジュウイチホシウリハムシ(11件)	バセリ(4)レタス(2)ズッキーニ果実(1)他4種(4)	アメリカ(11)
		<i>Otiorynchus sulcatus</i> キンケクチフトソウムシ(9件)	セイヨウキス夕笛(5)セイヨウアジサイ生植物(1)他3種(3)	デンマーク(6)ベルギー(2)オランダ(1)
<i>Otiorynchus ovatus</i> イチゴクチフトソウムシ(3件)		モミ属切枝(2)ブルーベリー生果実(1)	アメリカ(3)	
<i>Pantomorus cervinus</i> フラーパラソウムシ(7件)		プロテア切枝(2)リュウカデンドロン切枝(2)他2種(3)	ハワイ(6)オーストラリア(1)	
<i>Zabrotes subfasciatus</i> ブラジルマメソウムシ(7件)		ライマメ(6)インゲンマメ(1)	ミャンマー(7)	
<i>Aleurocanthus woglumi</i> ミカンクワダコナジラミ(6件)		サカキ切枝(3)ヒサカキ切枝(3)	中国(6)	
<i>Dendroctonus ponderosae</i> アメリカマツノキクイムシ(2件)		ホワイトパイン(1)ロッジボールパイン(1)	アメリカ(2)	
<i>Radopholus similis</i> パナナネモグリセンチュウ(2件)		ショウガ(2)	インドネシア(2)	

海外のニュース

海外における Karnal bunt の発生

Karnal buntは、*Tilletia indica* によるコムギのなまぐさ黒穂病の一種で1930年にインドのKarnal (現パンジャブ) 地方で初めて発見された。IMI植物病害分布図No. 173 ed. 5, (1996) によると、本病はインドの他、パキスタン、イラク、ネパール、アフガニスタン及びメキシコで発生しており、1996年3月にはアメリカ合衆国アリゾナ州で発生が確認された。

本病は、コムギ種子中に無数の黒穂胞子を形成し、やがてそれらが噴出した後、穂に黒い粉をまぶしたような外観を呈するとともに悪臭を発生し、小麦粉の品質を低下させる。病種子中の黒穂胞子は風媒伝搬され、土壌中で数年間生存し、病種子とともに伝染源となる。

このため、本病の防除には病種子の検出と種子及び土壌消毒が重要となるが、温湯浸漬による種子消毒及び日光による土壌消毒が効果的である。ほ場での本病は穂の数粒、あるいは一部の種子に

しか典型的な黒穂症状を呈さないため、発生を確認するのは困難である。また、種子検定にあたって、他の黒穂病菌と本病原菌とを形態により識別する必要があるために、多量の種子検定では顕微鏡による形態観察は適さないなどの問題点があった。しかし、近年PCRによる種子からの検出法が開発され、病種子の迅速かつ高感度検出が可能になった。一方、インド、メキシコでは抵抗性品種も発見され、その栽培が推奨されている。今後、抵抗性品種の開発の他、本病の発生予察法、化学的防除法などに関する研究が望まれている。

(Plant Disease vol. 81 (12) 1997)

発行所 横浜植物防疫所
〒201-0003 横浜市中区北仲通5-57 横浜第二合同庁舎 ☎(045) 211-7155
 発行人 小林 敏 郎
 編集責任者 今村 毅
 印刷所 内村印刷株式会社